

目次

異界のミステリー

世界で一番、みじかい小説

山白朝子

5

水に集う

近藤史恵

53

化鳥

皆川博子

97

実験

竹本健治

135

編者解説  
千街昂之

177

世界で一番、みじかい小説

山白朝子  
やましろあさこ

中央線沿線のマンションで家内と二人暮らしをしているのだが、先日から三人目の人影を部屋で見かけるようになった。たとえば僕がソファアに座って読書をしているとき、視界の端にだれかが立っている。家内だとおもって気にしないでいると、洗面所の方から家内がやってくる。じゃあさっきのはだれだ？ 顔をあげてあらためて確認すると、もうそこにはだれもいなかったが、たしかに人がいたようにおもうのだ。

深夜に目が覚めたときのこと、家内を起こさないようにベッドを抜け出し、トイレへむかっていると、廊下の先の暗がりにはだれかが立っているような気がした。見なかったふりをしてトイレで用を足し、手をあらってもどる途中、やはり気になってそちらに目をやると、さきほどよりもはつきりと廊下の暗がりにはだれかがいるとわかる。ちかづいてそいつ

の正体を確認すればよかったのだが、僕はこわくなって寝室に駆けこみ、布団をかぶってふるえていることしかできない。

つかれているのだろうか。あるいは心の病気なのかもしれない。何らかのストレスが精神状態に負荷をあたえているのではないか。仕事はそれなりにいそがしいものの、職場の人間関係は良好だ。夫婦仲も問題ない。結婚三年目で、まだ子どもはおらず、家内は美人だ。結婚式に来てくれた友人から、うらやましがられたほどに。彼女のことで気になるところと言えば、性格がクールすぎることだろう。

「最近、部屋にいると、おかしなものを見るんだ」

ソファアで眉間をもみほぐしながらため息をつく。仕事を終えて帰宅した直後だった。カウンターキッチンのもこうで夕飯の支度をしながら、千冬が返事をした。

「うん、私も見る。何日か前から、男の人を。部屋の掃除をしていると、隅っこに立っていた」

料理が盛り付けられた皿をテーブルにはこぶ。彼女は冷静そのもので、おびえている様子はなから、おどろいてしまった。それが見えるのは自分だけだとおもいこんでいた。